

反障害通信

16. 11. 18

61号

今、何が必要なのか？

アメリカで、差別排外主義のトランプが大統領になりました。日本では大統領選前に TPP のかけこみ強行採決をしました。保護主義的などころのトランプ大統領の登場は、TPP に反対している立場では歓迎とかいうとらえ方も出てきそうですが、アメリカ第一主義を掲げるところで二国間交渉でごり押ししてくることは明らかで、日本の対米従属でそのことをどこまで跳ね返し得るか危ういことです。そして、そもそも世界資本主義の流れとして新自由主義的グローバリゼーションの道を進んできたわけで、そこから逆向きに展開していくことを支配層の資本家が許すのか、そして強行に保護主義的な処に行けば不況ということをもたらし、国内的なことで批判が高まり、排外主義的などころで成立したトランプは、批判をかわすための常套手段として戦争に打って出るという恐れもあります。トランプが大統領となったことで、ヨーロッパの極右政党が勢いづきそうです。

さて、危機の時代は逆に矛盾が高まり、社会を変え得るチャンスでもあります。

日本に於いて、圧され放しの状況です。昨年国会前で、シールズという若い学生のひとたちが頑張り戦争法案反対で 70 年安保以来の大きなうねりを作りました。そして、そこから市民運動的などころで、戦争法廃棄とアベを打倒する野党合意ということがなされ、野党共闘ということがそれなりに進みました。しかし、戦争法廃棄にはほど遠く、途中目標を下げた改憲勢力三分の二の阻止ということさえ、なしえませんでした。もっと悪い状態になることを野党共闘は阻止し得たという論評はでています。今、TPP 反対が国会とその周辺では大きな課題として出ているのですが、「なぜ、戦争法と同じように参加してこないのだ」という意味不明の批判が出ています。

ひとつはそもそも今年の戦争法反対の集会はシングルイシューとして始まりました。そしていくつかのこともテーマとして掲げましたが、そのつながりはなんだったのでしょうか？ シールズはいろんなひとの集まりです。ですが、いろんなひとのいろんな思いのベクトルで形成されていた運動で、その集会での意見や対談とかも含めたことで、おぼろげなりともとらえられることがあります。「生活保守」とか、「革命はやらない」とか、いう言葉が出ていました。そして問題をトータルにとらえて、そしてそこからテーマに遡るということはしなかったということです。たしかに、戦争はいやだとか原発は危ないとか、そういうことは掘り下げなくても聞える課題でそういうテーマと強権的政治に反対するということで聞えたのかもしれませんが。そもそもシールズの課題には学生の生きがたさということがあったのですが、いつのまにかそれは消えていました。運動のおおきなうねりを作り出すには、この矛盾する社会を変えようというエネルギーと結びつくことが必要なのだと思いますが、むしろそのことは逆向きに、「革命とかやる気持ちはない」というメッセー

ジが発せられていました。

シールズに影響をあたえたであろうひとたちとの対談などで、明らかになっていることがあります。今回読書メモに書いているのですが、要するに、「社会は変わらない」ということを言っているひとたちの影響を受けて活動していたようなのです。そもそも日本の選挙での投票率の低さは「どうせ社会は変わらない」という意識に根ざしているのです。今回のアメリカの大統領選での動きにあらわれているように、矛盾は深化し閉塞感から抜け出したいという、そういう意味で変化を求める意識はあるのです。それがトランプやアベノミクスの幻想のように逆向きのベクトルにとらわれていくのです。「小泉元首相や安倍首相がやっていることが革命で、自分たちは反革命だ」とかいう、意味不明の言葉さえでているのです。

ひとつだけはっきりしているのは、現実に向けられてくることへの抵抗運動は勿論必要なのですが、この状況を変えるには、「社会は変え得る」というメッセージが必要になっていることです。一時期、スーザン・ジョージらオルター・グローバルイゼーションということでも「もうひとつの世界は可能だ」というスローガンを出し、新自由主義的グローバルイゼーションへの反対運動として、サミット反対の運動とか展開しそれなりの盛り上がりを生み出したのですが、しぼんでしまいました。これからどういう社会を作っていくかというイメージが「もうひとつの世界」ではつかめなかったからではないでしょうか。なぜ「もうひとつの世界」というスローガンだったかということ、それはソ連邦の崩壊から「社会主義国家」の破綻として、マルクス葬送の流れが形成され、資本主義社会はなくならない、変わらないというイデオロギーが流布され、それに「革新」的なひと巻き込まれています。「社会主義国家」という中での、肅正や虐殺、抑圧・弾圧ということへの批判がそこにはあります。確かに、「社会主義国家」といわれることが社会帝国主義や国家独占資本主義でしかなかったという批判はできえます。しかし、マルクス主義を標榜した運動の中のさまざまな矛盾を、情勢分析や方針を誤ったグループや「社会主義国」の誤った方針の問題で、自分たちとは関係ない」と切り捨て得ません。暴力主義—反暴力主義—非暴力主義の問題としてとらえ返しの問題も含んで総括していかなければならないと思います。

マルクスの思想を葬送してしまったのでは、情況分析さえなしえませんが、市場原理—競争原理はなくなるとか、差別はなくなるとかいう観念—イデオロギーに広くとらわれてしまったところで、マルクス葬送に流れていけば、今わたしたちの抱えている矛盾の分析さえなしえなくなります。サルトルやデリダが、「マルクスの思想は現在社会—資本主義社会では乗り越え不可能な思想」として突き出した意味をとらえ返すことです。

アベノミクスとかトランプの経済政策とか、そもそも新自由主義的グローバルイゼーションというところをとらえ返せば、格差の拡大、1%のひとの99%のひとへの支配の構造ということがとらえられます。その経済的行き詰まりの中ででてきたアベノミクスなどの政策は、危機の先送りでしかなく、そのことを戦争とファシズムの突撃の中で乗り切ることでしかなくなります。

今、差別排除主義の極右政党やイデオロギーが台頭してきています。アメリカ大統領選ではサンダースの登場があり、ヨーロッパでも反資本主義をかかげる勢力の台頭もあります。日本では左翼勢力の混迷の中で、ファシズム的動きに対して抵抗的運動としてしか展

開し得ず、野党共闘として展開されている状況ですが、それだけでは大きな動きにはなりえませんし、いずれ行き詰まっていくことも見えています。今こそ、「社会は変わる—変え得る」というところでの反転攻勢を準備しなければなりません。

わたしは反差別というところから、過去の運動の総括をなしながら、資本主義社会の批判的分析をなしていきます。それは中身的には反差別共産主義論として展開し得るだろうと思っています。

すでに、「反障害原論」で切り口は見せています。それを含みつつ「反差別原論」としてまとめていきたいと思っています。

この文は、その「反差別原論」「反差別原論」の「序文その1」の位置をもっています。

(み)

(『反差別原論』断章(1)としても)

読書メモ

今回は今年の運動のとらえ返しのために読んでいた、いろんな対談への読書メモが3本。脳死臓器移植反対の講演会のための読書メモ、講演の感想も含んで。被爆関係2冊。相模原事件関係での石原×斎藤環対談と『現代思想』の特集です。もうひとつ、映画鑑賞につながる廣松シェーレのひとの本がもう1冊。

たわしの読書メモ・・ブログ 351

・笠井潔×野間易通「革命とヤクザ」(『図書新聞 3271号』2016.9.17所収)

この対談は笠井潔/野間易通『3.11後の反乱—反原連・しばき隊・SEALDs』集英社新書の出版につき図書新聞の一面記事として、高橋若木さんの司会で対談した記事です。

要するにマルクス葬送の流れの中で市場経済はなくなるといふ思い込みで走り、現在社会の分析なき、空虚な「革命論」に陥っているのです。

そもそもロシア革命はその成立直後に「社会主義」の道を踏み外していたのに、それを「社会主義」を建設していったという間違った分析から、ソビエト連邦の崩壊を「社会主義国家」の崩壊という錯誤に陥り、更にマルクス共産主義論の破綻として押さえてしまったマルクス葬送派とマルクスの思想なき理論の空虚な議論です。

なぜ、マルクスが『資本論』を書いたのか、サルトルやデリダがなぜマルクスを、「現在社会で乗り越え不可能な思想家」として規定したのか理解できていないのです。マルクスを葬送して、現代社会の分析をどのようにしてなしえるのでしょうか？

たとえば、オルター・グローバルゼーションの「もうひとつの社会は可能だ!」というスローガンが、その「もうひとつの社会」のイメージがつかめないうまま尻つぼみになってしまったこともとらえ返さねばならないのです。

結局マルクスから出発し、そのマルクスの限界を押さえ、どう新しい理論を作り出していくかが問われているのです。

マルクス主義を僭称した自らの運動の総括、すべてのひとたちの運動のとらえ返し—対

話から、その総括を為しきることから改めて出発することではないかと思ひます。

わたしとしては、それを反差別共産主義論としてまとめていきたいと思ひています。

この文、反原連・しばき隊・SEALDs ということがつながっているとらえていたことが、その思想なき運動論として確認できるのではないかと、とらえられるのではないかと思ひ浮かんであります。

その本にあたってみようと思ひています。

たわしの読書メモ・・ブログ 352

・山崎吾郎『臓器移植の人類学—身体の贈与と情動の経済』世界思想社 2015

この本は「臓器移植法を問い直す市民ネットワーク」の次回講演者の著書として紹介されていたので、いつものように講演前に読みました。

大阪大学の若手の教員のひとで、これからどういふように研究を進めて行かれるか、期待がもてるひとなのです。

ドナー・ドナー家族とレシピエントの双方にインタビューして書かれた本です。どちら側にはのめりこまないとして、学的に研究を進めています。ですが、そもそも移植反対派の理論との対話がきちんと為されているとは思えないのです。小松さんが文化相対主義と批判しています。

そもそも①、モースの『贈与論』から、臓器移植を贈与としてとらえようとしています。しかし、そもそもモースの『贈与論』の読み方として、モースは文化人類学的研究として、「見返りをもとめない純粋な贈与というのではない」、としています。これをわたしは、「利害関係—差別的関係がすでに発生しているところでは純粋な贈与はない」というところで、もっといふば差別が発生しているところ、その土台として私有財産制が発生しているところ、というところでの贈与論だと押さえています。その幻想に過ぎない贈与というところで、それをキーワードにして議論を進めていくので混乱しているのではないかと思ひえるのです。確かに、臓器の商品化を抑えようとしているのですが（それでも実質商品化はあつてしまっていますが）、それでも技術を売る、そして免疫抑制剤を作る会社の利潤追求ということ、脳死・臓器移植産業の形成が裏で進んでいるのです。もちろん、ドナーとドナー家族のおおよそ無自覚なところでの、医療費を押さえよう、生活の負担を少なくしようということが底にあります。

もうひとつは②、そもそもひとのモノ化なり、臓器のモノ化というのは、わたしは労働力の商品化というところから来ているのてばないかと押さえています。だから、そのあたりの分析まで進まない、モノ化の構造ということがとらえられないのです。

最後にもうひとつ③、優生思想というところで脳死・臓器移植批判をしているひとたちは展開しているのですが、そのあたりのコメントが全くないのです。命の序列化ということを通したひとの序列化をどうとらえるのかという問題です。そのあたりとの対話がほとんど為されていません。

冒頭に書いていふようにこれは講演に合わせて読んだ本です。講演後に改めて、文を書きます。いろいろ勉強できたことの抜き書きもそのときに書きます。

講演後の書き足しです。

講演はパワーポイントを使ってなされました。本の内容にない議論として科学論あたりがあり、その問題で質問が出て議論もなされていました。そのあたりも、わたしは科学的なことを少しはやってきたので、レジメと講演の記録が出るとお思いますので、改めてとらえ直していきたいと思っています。冒頭に書いた対話が足りないということ、質問や感想の中で、家族の立場で反対派のひとの話とか、反対してきた医師の立場で話されていたのですが、そもそも資料を収集するということでインタビューを軸にして進められていく文化人類学的手法で、問題を掘り下げていくということがどこまで進んでいくのかの問題があるのではと思います。思想的なとらえ返しが必要になっていくのではともお思います。とにかくそのあたりは講演の記録が出てきたところでの再度のとらえ返しにします。

ここでは、講演前の問題意識に沿って、今回はわたしも質問をしたので、そのあたりをまとめて見ようと思います。

まず、①に関してはインタビューというところでは出てこない回答のこととしてわたしは質問をしました。贈与ということが純粋な贈与ということはないということ、インタビューで出てこない本音のようなことを押さえる必要があるのではという話です。そのあたりは、贈与ということをごかましのことばではないかということとしてまとめたのですが。実はわたしの母への介護体験から来ている話で、きょうだい達が延命処置に反対する中で介護に当たる中で、きょうだいたちが何を考えているかをとらえ返す中での、ホンネのようなことがとらえられたことで、そのあたりをきちんと話さなかったことで、なんのことが通じず、講演者の返答が安楽死や尊厳死の問題に直結されたのではないかとお思います。これらのことはアメリカで脳死になれば医療費の保険が下りなくなるとか、日本では医療費がかさむとか、介護の態勢の中で仕事ができなくなるとか、病院や施設に預け放しになるとかという問題で、そこから解放されるための、ごまかし、自己欺瞞的なこととして出てくることはないかと思うのです。そのあたりはインタビューの回答としてほとんどでてくることはないのではと思うのです。

実際に、講演者は「もう脳死・臓器移植は止める訳にはいかない」という話をされました。それはもしそうすれば、もっとひどい状況に陥るから、という話なのですが。このあたり、講演のときも、その後の食事会のときも、きちんと対話しえませんでした。わたしはこのあたりは、グローバルゼーションの時代の、国際競争力というところで、資本の輸出や企業の海外進出、財産を海外に移すひとが出てくるからということで、累進課税の軽減とか、法人税の減税をやってきたことの話にも通じます。金持ちのための政治をしていく格差拡大の政治、1%のひとが99%のひとを支配するための政治になっていく議論と同じ構造だと思っています。実際にはタックスヘブンということで、内部留保したものがどんどん外に出て行っているし、まさに資本には国境はないということになっています。資本に倫理などないのです。それは国際協調でタックスヘブンの国への制裁とかとか、少しでも軽減できることですが、そもそもそんなことやりそうにはないのです。それは資本の論理といえることで、そもそも資本主義を前提にした論理の枠内でなぜ議論をするのかという問題がもうひとつあります。

このあたりの話は②とつながるのですが、廣松さんが廣松シェーレということを形成し

ながら、その自分の周りのひとたちが干されていくのを気にかけていたという話があります。そのようなことは、マルクス葬送がなぜ学問の世界で広がっていくのかという問題にも通じます。障害学の立岩真也さんや女性学の上野千鶴子さんも、市場原理はなくなるといいうところから論を進めます。そこに無自覚的な「飯が食えなくなる」という意識が働いているのではないかというわたしの想いがあります。「無意識の抑制」といわれることではないかと思うのです。文化系の学部・学科をなくせとか、予算が少なくされていく中で、資本に商品経済に役に立たないことはつぶしていく構造の中で、さらに資本主義的なことに合わないことが、ますます学的にもしぼんでいく中で起きていることです。

さて、③に関しては、わたしは「「ぽっくり死にたい」ということの文化人類学的研究をして欲しい」という提起をしました。

「ぽっくり死にたい」ということは単に尊厳死や安楽死にとどまることではありません。そのような決断をできないということで、願望としてもつということも含めたことなのです。これは実はわたしの母も言っていたことで、「障害者運動」に関わっていたわたしは、「それって、「障害者運動」の存在を否定することだよ」と批判し、わたし自身が抑圧的になっていったのですが（これは「わたしは介護は苦痛でないし、むしろやりがいがあるんだよ」と対話していくことだったと反省しています）、ALSの患者さんたちの80%が（今は少し下がっているかもしれませんが）、人工呼吸器を着けないで死んでいくとしても、着けないと言っていたひともいざとなると着けるといふこと、要するに家族に迷惑をかけないようにとか、生活の不安、のたれ死の恐怖ということで、出てきていることかと思うのです。そのあたりのところから、切り込んでいく研究のようなことが必要だと思うのです。インタビューだけでは出てこない、掘り下げこそが必要なのだと思っています。

講演後の飲み会の席でいろいろ話もできて、おもしろい方向に開いて行く可能性とか考えられたのですが、飲み会の席の話はオープンにはできないので、ともかく、若手の学者でこういう研究をしているひとは貴重な存在なので、いろいろ話をして行けたらと期待しています。

この読書メモは、そもそも本を読んでも少しも頭に残っていかないというところで、それどころか、本を買ったということさえ忘れていくというところで、危機感を覚え書き始めたのです。そこで、後でまた読み直すときがあれば参考するためにも、抜き書きをも残しています。

「特殊な例外」2P・・・脳死臓器移植に対する日本の生命観・・・サイドが指摘する西洋中心主義批判

「エコノミー」の三つの視点 15-16P・・・調整機能としてのエコノミー＝体制、合理的な取引という側面を強調したエコノミー＝経済、身体の情動的側面のせり出しにおける周辺環境という意味におけるエコノミー＝生態（エコロジー）

ひとのモノ化 41P・・・資本主義批判と内に孕む（賃金）奴隷制

モース贈与論 54P

プロセスへの移行において治療の枠組みの外側に 66P

エーゼンシー79P・・・主体概念・・・近代知

主体の産出 80P

「素人の知恵」の制度への回収 85P

インフォーム・ドコンセントにおける「理解」の抜け落ち 86P

脳死をパッケージとして受け入れることによる「自己決定」の欺瞞 90P

知識の再帰性 91P

医療関係のモデル 91P・・・障害学における医療モデル批判との対話

「便利な生活実践」 92P・・・知識の再帰性との関係で差別の構造の形成

「あくまで関係性の中で生起する」 133P・・・廣松関係論との対話

「フィクション」 136P・・・フィクションの物象化

「ある種の市場がなり立っているのではないか」 207P

認識の逆転・・・数が足りないという問題へのすり替え 208P

経済学的統制 208P・・・「エコノミー」の三つの視点 15-16Pのひとつ

経済学統制による医療のまなざしの変化（ポテンシャル・ドナーの析出） 218P

死の問題の生の問題への回収 226P

身体と技術 238P

「ハイブリッドの増殖」 238P

「技術と結びついた生」・・・「自然な身体」「自然な環境」「中立的な観察主体」の想定
の困難性 240P

「関係性にとどまって思考する」・・・当事者意識と第三者意識の弁証法

たわしの読書メモ・・・ブログ 353

・全国被爆者青年同盟『君は明日生きるか』破防法研究会 1972

この本は被爆問題の本です。60年代後半から70年代初めの反乱の時代に作られた被爆者・被爆二世の集団の運動の本。久しぶりの紋切り型のアジテーション的文を読みました。型にはまった繰り返しの攻撃的文（というより反撃的文）なので、届かないアジテーションのようなことをやっていたのだなど、自らの反省も込めて読んでいました。が、それでも、紋切り型の中で、必要な論点を押さえていく作業をなしていたし、とりこまれていくひとたちの状況も押さえる作業をしているのです。今は、そういう押さえていく作業さえなされない状況をなんとかしなくてはとも思います。

被爆被害のことは分からないのですが、当時被爆二世の被害ということも含めて死者がでていたようです。それを断じていくことは余りなくなっているのですが、却ってそのことで、沈黙していく体制も作られていったわけです。

改めて、このあたりのこときちんと押さえていく作業が必要なのです。放射線被害は「科学的に」ほんとにわかりにくい、しかしそのことでごまかされていく構図があります。科学批判ということも含め、きちんと押さえていく作業が必要なのです。被爆二世として自分の立場性を突き出しきちんと提起していかねばと思っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 354

・仲川文江『生きて愛して一目で聞いたもうひとつのヒロシマー』ひろけん 1989

この本はヒロシマ被爆の問題を軸に、ヒロシマのろう者の聞き取りの本です。著者はコーダのひと、ビデオを回すと、おそらく緊張して話せなくなるというところで、聞き取り翻訳のむずかしさを感じつつ、それでもすごい翻訳ということを感じます。でも、とりわけ被爆の悲惨さ手話での表現の妙、見てみたいという思いがあります。ずっと前に買っていた本、手話のお芝居の際に、著者が来ていて本の販売をされていて、リンクして読もうとして読めなかった本、原爆関係の読書の中でやっと読めました。

それにしても、当たり前の一ひとりひとりの生ということがあるのだということに改めて感じていたのです。とりわけ原爆の悲惨さを感じつつ。

たわしの読書メモ・・ブログ 355

・石原慎太郎×斎藤環「『死』と睨み合って」(『文学界 2016年10月号』文芸春秋)

これは、雨宮処凛さんがこの対談をとりあげていた文を、SNS のフェイスブックで更に引用しているのを読み、原典にあたって置こうと読んだ対談。

石原慎太郎さんの幾重もの勘違いとそれを指摘できない対談者の間で進んだ対談(対談という場で、面と無かつて批判するのはそもそも難しいのですが)。

勘違いとは石原さんの「この間の、障害者を十九人殺した相模原事件。あれは僕、ある意味で分かるんですよ。」と発言し、その後ヒトラーの元で障害者殺しをしたひとの息子がそれを「変質者」を殺したとして、正当化している話をしていて、さすがにそれに自分自身も違和を感じている話をしていっているのですが、相模原事件の「犯人」は、「触法精神障害者」を殺したわけではないのです。どうもヒトラーを石原さんも批判しているようなのですが、自分がヒトラー的な考え方をしている、数々のヘイト発言をしていたことを押さえていないようなのです。

石原慎太郎さんは「大江なんかも今困っているだろうね。ああいう不幸な子どもさんを持ったことが、深層のベースメントにあって、そのトラウマが全部トラウマが全部小説に出てくるね。」と発言し、これにはさすがに、斎藤さんから「その体験が普遍的なテーマに昇華されて、世界的な文学になっているとも言えると思うんですけど。」という反論を受けています。

石原さんは、自分が「脳梗塞」を経験し、その「後遺症」と老いということを受け入れられないで、死の恐怖の中におののいているのですが、そもそも自分のこれまでの発言からすると、三島由紀夫のように自己を抹殺するしかないのです。死の恐怖からそれもでき得ず、頼る相手もいず、自分が忌み嫌っていた、グチグチ言いながら生きる、自分が「醜態」と言っていた生をさらしているのです。

「『死』と睨み合って」いるのではなく、死や自らの「障害」から目をそらして生きているのです。曾野綾子さんが80歳過ぎても、高齢者の「延命処置」を批判していることと同じ構図がここにもあります。

結局、弱者という立場に置かれているひとの、反転した生き生きとした生がこのひとたちには分からないのでしょうかー

・SEALDs×上野千鶴子「上野千鶴子（社会学者）×福田和香子、奥田愛基、牛田悦正（SEALDs）対話」（at プラス web）2016

これは本ではなく web「紙」上で行われた対談を文字化したものです。

瀬戸内寂聴さんと SEALDs の女性三人が朝日新聞紙上（2016.2.5）で対談して「青春は恋と革命だ」という見出しがつけられた文をとりあげ、それに対する上野さんと福田さんのやりとりから始まります。

瀬戸内さんは作家で、そもそも「革命」のニュアンスが違うのですが、社会学者的「革命」の定義から始まり、「革命はあり得ない。あるとしたら部分的なパーツの取り替えしかない」「市場経済はいかなる体制も否定することの出来ないデフォルトだ」という断言から始まります。

上野さんとわたしの対話

上野さんは「フェミニズムの旗手」としてもはやされた一時代を築いたひとで、わたしもフェミニズムの学習を上野さんの論攷から始めました。まるで、コピーライターのような提言をしてきたひとで、与えるインパクトの強さは大きく、わたしはああでもないこうでもないという論攷をやってきた立場から、とてもまばゆいひとです。ですが、「誤解を恐れずに言えば」、というような言葉を冒頭につけて論じるのではなく、断言的に提言していく内容には、あまりにも論理的に雑すぎるし、誤解を生じる、論理的におかしいと思えることも多々ありました。ですが、当初はそれは上野さん流のやり方で、そうやってインパクトのある提言をしておいて、批判を受ける中で後から論理的に沈降していく方法をとっているのだと思ったりしていました。対談をあちこちでやってきていて、フェミニズムに関することでは論破していくこともあったのです。少なくともわたしの読んだ範囲です。

インターネットでのやりとりに限るのかもしれないのですが、今回の対談で批判は無視するみたいな言葉が出ていて、結局このひともちゃんと対話しながら自らの論考を深めていくということを欠落しているのではと思ったりしています。

さて、わたしの上野さんに対する対話は、上野さんが海外の文献を紹介しつつ、日本におけるマルクス主義フェミニズムの論陣を張ってきたというところで、家事を労働力の生産再生産労働として押さえ、そこからあらゆる分野でその観点から論攷を進めてきていてフェミニズム的観点を学んでいきました。上野さんはフェミニズムの最前線の二代潮流、マル・フェミだけでなく、ポスト構造主義的フェミニズムのこともとり入れ「構築主義」的論考も織り込んでいきました。わたしは障害問題を軸に反差別論をやっていたから、構築主義の脱構築論も反差別論に援用していました。

そういうこととして、上野さんを「マル・フェミと構築主義のふたつのステップに足をおいてフェミニズムの旗を振っているひと」というイメージをもっていました。

気になっていることがひとつありました。それは上野さんが「わたしはマルクス主義者ではない」と書いていることです。ですが、上野さんのフェミニズム的沈静は団塊の世代の運動における左翼への絶望的なところから始まっていて、それはわたしの「障害者運動」も、左翼が差別の問題をとらえられていないところから再出発したこともありそのことと

類比してとらえていました。そもそも、マルクスが「わたしはマルクス主義者ではない」と言っていたとかということもあり、教条主義批判としてひとの名前を冠した〇〇主義という言い方をやめようという思考がわたしの中にもありました（ただ、わたしはマルクスの思想の影響下で論考を進めているということで「マルクス派」という言い方をしています）。

さて、上野さんの本を読み進める中で、わたしの中で膨らんできた思いがありました。それは論考の掘り下げが途中で止まってしまうのです。性差別を資本主義社会の原理、市場原理、商品社会、産業社会、私有財産制と分業の問題まで掘り下げてとらえていく観点を、わたしはマル・フェミから学んだのですが、それがなくなっている（いった？・・・元々あったのか、なかったのか？）のです。

それがこの読書メモの最初でとりあげた上野さんの革命の否定の話につながります。

そうなるとうどうなるのか、そもそも性差別はいかなることを根拠に起きているのかのマル・フェミの分析に依拠できなくなります。そこでは、結局「性差別はなくなる」ということにつながっていきます。なぜ、サルトルやデリダが「マルクス主義は資本主義社会では乗り越え不可能な思想」と提起したのかの問題にも通じます。「差別はなくなる」となると、差別のモグラ叩きにしかならないのです。障害学でも同じような問題が起きています。

今、社会全体が「社会は変わらない」というドグマにとらわれています。それで政治的無関心、選挙の時の投票率の低下、自公政権の維持につながっているのですが、「革命は起こらない」ということを、いかなる根拠で言っているのか、さらにそれは「社会は変わらない」ということで政治的無関心につながっていくこととしてとらえていないのでしょうか？

これについては脱線していくので別のところで書きます。

非暴力主義と実力闘争の否定

さて、もうひとつ何か違いのようなこと、上野さんは牛田さんが国会へのデモの隊列をとめたことに賛同し「暴力主義は警察の弾圧を招くからいけない」とか話しているのですが、それは非暴力主義と実力闘争を否定していたことを混同しているのではと思います。沖縄では今、非暴力ですが、実力闘争を展開しています。その実力闘争を否定するのでしょうか？ それは暴力主義とは違うことです。戦争法でも横浜の公聴会で座り込みをしました。あれは実力闘争で決して暴力主義ではありません。シールズは非暴力主義だけでなく、実力闘争はやらないというように立てていたと思います。それは幅広い運動のためにということだったと思っていたのですが、上野さんも「暴力的なことをやるとみんなが引く」と言っています。ですが、そもそもシールズを知らないひともいたし、そもそもシールズってこわいという話が巷では出てました。反政府的運動ということ自体がこわいという雰囲気にならなっているのだと思います。ネトウヨが気合いの入った奥田さんのコールを「恐ろしいひと」として流していました。シールズは「言うこと聞かせる番だ、俺たちが」とか「本気で止める」というコールをしていました。わたしは実力闘争をすると引くというのなら、そんなコールは止めた方がいいのではないかと思っていましたし、警察が「自分たちがいうことを聞かせるのだ」というところで暴力的に対応してきた現実をど

うとらえていたのでしょうか—わたしは反差別の立場にたつので、根源的反暴力主義ですし、現実場面では非暴力的な運動が必要だとは思いますが、非暴力主義とは違うと思います。ガンジーが非暴力主義でカースト制度を維持する役割を担ってしまったという意味で、反暴力主義ではなかったという批判もしています。

わたしは非暴力であれば、実力闘争を展開しても、確かに被害は出るとしても覚悟してやっていることで、何か止め得る可能性があるとしたら、そこにしかなかったと思います。「本気で止める」としたらです。

母性神話批判とジェンダー批判

さて、わたしは福田さんと上野さんの対話を軸にこの対談を読んでいました。福田さんの感性的な性差別のとらえ方を、被差別当事者としての感性的なすどさとして感銘していました。わたしは反差別と言うところで運動的にどうしてもとらえてしまいます。だから、フェミニズム的に定立して欲しいという願いを持ってしまいます。差別を差別としてとらえかえたところで、その問題はどのようなことであり、それをどう解決していくのかというところで運動して行って欲しいという、ないものねだりをしてしまいます。シールズで、議論的な話になると男が全面に立って女性は引いてしまう、ということ語りつつ、それをどうして受け入れてしまうのか分かりませんでした。むしろ福田さんからすれば、わたしはわたしの人生を生きているというスタンスだと思いますが。

よく分からない話がまだあります。暴力主義の批判をするのに、上野さんは軍事的な展開になると女性が後景に退くという話です。まさにジェンダーの話です。ところで、湾岸戦争の時アメリカの女性団体が女性を戦争の最前線に立たせないのは差別だ、最前線にも配置せよという提起をされていて、問題になっていました。それは戦争というのはまさに力—暴力によって相手を屈服させることで差別の極としてあり、差別されるのはいやだ、差別する側になりたいという論理になっているという批判だったとわたしは押さえています。ですが、上野さんは後景に退くという、なぜ、そんなジェンダー的な決めつけが起きるのかという、差別の問題があります。実際にテクノロジー化している軍事の中で、女性も最前線に出ている中で、またイスラム原理主義の性差別的なことがある中でも、自爆テロに女性も担う中で、なぜ決めつけをしているのか分からないのです。

そもそもジェンダーの最前線の話をしてきた上野さんが、なぜジェンダー的な話を自らしていくのか分からないのです。

「女嫌い批判」とその裏返しとしての「男への反発」

さて、上野さんと福田さんの間で、男の女性に対する対応に対する批判、上野さんの言え、言え、「女嫌い」の言説に対する批判があり、そこでのふたりの共鳴があったのですが、それがどうも「男への反発」（ここは対称敵には「男嫌い」となるのですが、それは性差別的に別なところにおちこんでいくので・・・）みたいな話になっていくのが分からないのです。わたしは、それこそが社会学者として、なぜそのようなことが起きてくるのかの分析が必要なのだと思うのですが、それこそ、資本主義批判を放棄したところで、社会分析的なところからの切り込みができなくなっているのではと思います。「〇〇嫌い」ということはドグマである、というところで批判していくとしたら、上野さんは「男への反発」と「左翼嫌い」というこれもひとつのドグマに陥ってしまったのではないのでしょうか？

閉塞感を超えるために

最後に、そもそもアベ政治の批判をしているひとたちが、どうして「革命は起こらない」というような言説にとらわれていくのかということを押さえてみます。それは革命の定義をいかようにしようと、結局「変わらない」ということを自ら掲げて行くことになります。奥田さんは「生活保守」とかいうことを言っています。そもそもシールズは戦争法反対だけでなく、学生の生活がなりたたなくなっているということを取りあげていました。1%のひとの99%のひとの支配とかいう批判も出ています。そのことがどこから来ているのかをとらえ返す作業が必要です。「革命は起こらない」という言説は、そのことの分析を止めてしまうことにつながっていると、わたしには思えません。そもそも、自民党内の保守が崩壊していつている現実をどうとらえているのでしょうか？ まさに戦争とファシズムの突撃か革命かという時代になっているのではないのでしょうか？ それで「生活保守」ということが成り立つのでしょうか？ トロッキーが『ロシア革命史』の中で、「民衆は進歩的だから革命を起こすのではない、保守的だから、自らの生活が成り立たなくなったとき、革命を起こすのだ」という趣旨のことを書いています。まだ、もう少し余裕があるのでしょうか？ 新自由的グローバリゼーションの進行は格差をますます広げ、中間層を貧困層に落とし込めていきます。そのときに、「生活保守」ということが成立するのでしょうか？

シールズはそれなりの高揚する運動を生み出しました。そのことははっきり押さえておかねばなりません。ですが、まだまだ少数派ですし、政治的無関心層がかなりの割合を占めています。そして、「結局社会は変わらないよ」という意識の強さがアベ政治を許してしまっています。冒頭の瀬戸内さんの「青春と恋と革命」ということは、「世の中そんなにすてなものじゃないよ、社会は変えうるんだ」というメッセージだったとわたしは思っています。それなのに、なぜアベ政治を批判している上野さんが、そういうことを否定してしまおうとするのか、わたしにはとても理解できません。

さて、かつて、「もうひとつの世界は可能だ」というスローガンの元、サミットへの抗議行動がかなりもりあがっていました。ですが、「もうひとつの世界」のイメージが出てこない中で、尻つぼみになっていきました。そそういう曖昧な言い方は、過去の運動の総括からの回避から来ていると押さえています。わたしは資本主義社会の分析の出発としてマルクスの思想があると思っています。それを乗り越える思想が出て来ないというところで、「マルクス葬送」ということをきちんと批判しきり、きちんと過去の運動の総括を為す中で正面突破できる理論を形成していかねばなりません。そもそもマルクス葬送は、マルクス主義者が差別の問題をきちんとおさえられないというところから、各反差別の戦線の離脱から始まっています。上野さんもフェミニズムの反差別というところから、左翼批判に入っていたのです。わたしたちは差別の分断を超えるためにも、反差別共産主義論として、共産主義論を創成していかねばなりません。そもそもソビエトを「社会主義国家」と規定し、さらには国家と共産主義はアンチノミーなのに「共産主義国家」として誤って規定することから混乱が始まっています。ソビエトやそれに続き「社会主義国家」は国家独占資本主義でしかなかったし、「社会帝国主義」と規定されるものでしかなかったのです。共産主義を志向する運動もきちんとした共産主義論の形成なしにさまざまな矛盾の中で崩壊し衰退していきました。ソビエトの崩壊は「共産主義の破綻」などではないのです。未だ

共産主義など成立していないのです。それをわたしは反差別という切り口で共産主義論を形成していきたいと思っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 357

・米村健司『波・音・面—廣松渉哲学の射程とその教育論』世界書院 2009

この本は、わたしが自分の本の編集の打ち合わせで会社に訪れていたときに、できたばかりで積み上げられていたのを買った本です。廣松シェーレのひとたちの本はだいたいがすぐ買うのですが、最近読めていません。この本も積ん読してしまっていたのですが、映像鑑賞メモ 014 の・牧原依里／零境 (DAKEI) 「LISTEN」 2016 を観たときに、共振性というところで、この本を思い出したのです。ちょっと間が空きましたが、やっと読めました。

この本は廣松さんの表情論、身体論や『共同主観性の現象学』などの心理学的なところを継承する、たぶん廣松さんからは直接指導を受けていない若い世代の意欲作です。

もうひとつこの本に留目することは、廣松理論と他の思想家のひとたちとの対話をこの著者は試みていることです。わたしは反差別論をやっていて、ポスト構造主義の脱構築論と廣松物象化論との対話を考えていました。結局、デリダはかじったものの、この本の中で対話を試みている、ドゥールズ・ガタリ「D-G」の本を積ん読しつつとうとう読めていません。この著者はそこに踏み込み、他のいろんなひとたちも含めて廣松さんとの対話を試みています。ただ、対話がかみあっているのかどうか、むしろ哲学的な深化からとらえ返す必要も感じています。

ただ、権力論あたりはむしろ、差別社会を前提にした議論になっていて、そのあたりは物象化に陥っているのではないかと違和を感じています。

とにかく、意欲作、わたしが今一度廣松学習に戻って行ったときに、もう一度読み直したいと思っておりますが、果たせるかどうか、その時間がとれるときには思考が効くかどうか、・・・。

もうひとつ、「LISTEN」というところからとらえ返して、「聞こえないひと」「目の見えないひと」からとらえ返した共振論がどうなるのかを、考えてみようと思っているのですが、これもどなるのか、むしろ当事者からの提起を受けたいと思っているのですが。

たわしの読書メモ・・ブログ 358

・笠井潔×野間易通『3. 11 後の叛乱 反原連・しばき隊・SEALDs』集英社(集英社新書)2016

この本は、ブログ 351 の「革命とヤクザ」、『図書新聞』紙上での対談のたわしの読書メモで気になっていたもので、本にまで手を出しました。

交換日記のようなエッセー風の全 10 章、各 5 章と「前書き」(野間)・「あとがき」(笠井)での応答です。

笠井さんのマルクス主義批判、それは「左翼なき革命」となり、野間さんの革命のとらえ方は、小泉・安倍政治を革命としてとらえ、(笠井さんのとらえ方によると)「革命なき左翼」という内容になります。

「左翼=革命をめざす勢力」ということを切断したのですが、革命ということば自体が

様々に使われますが、社会革命という意味ならば、現在社会は資本主義社会で、それを止揚するのが革命、という定義になります。笠井さんは最後に「資本主義や消費社会をマルクス主義者のように否定しない」236Pとなるならば、そもそも革命など問題にしないとなります。問題は「マルクス主義者のように」という断り書きです。笠井さんの批判は一定わたしも共鳴しています。それはレーニン主義・ボリシェビキズム批判なのです。ですが、そもそもマルクス主義の批判はなにも書かれていません。マルクス主義の正当派とされるマルクス＝レーニン主義批判でしかないのです。マルクス葬送の流れに入り込んでいっているのですが、では、マルクス主義を否定するにしても、マルクスの思想を捨ててしまつたら、どう現在社会を分析するのでしょうか？ 笠井さんの枠組みは基本マルクスの思想なのです。そこから資本主義をとらえ損なっているとしか思えない「革命論」になっているのです。

そもそもアベ政治をファシズム的な動きとして批判しているわたしの立場からすると、それを野間さんが革命としてとらえること自体が意味不明です。要するに、「思想がない」のひとことです。「思想がない」ということはありえないのですが、なにをしようとしているのか分からないのです。

「国民なめんな」コールへの批判は、国民国家批判で、ファシズム的なところの核としてある、国家主義への批判だったのです。そのことが届いていたから、SEALDs はいろんなひとがいたのですが、奥田さんは少なくともその批判を受け止め「民衆なめんな」コールも取り入れていました。

野間さんの影響が影を落とした出口のない運動になっていたのだと感じてどっと疲れが出ていました。

最近、マルクス葬送派のひとの本を読んでいるのですが、それなりに吸収することはあるのですが、とても疲れます。もう少し、共鳴しえる方向の本で対話したいとも思ったりしています。

たわしの読書メモ・・ブログ 359

・『現代思想 2016 年 10 月号 緊急特集＝相模原障害者殺傷事件』青土社 2016

相模原障害者殺傷事件の特集です。特集だけ読みました。

すでに『反障害通信 59 号』で、この事件についてはコメントしています。この雑誌を読みながら、そのコメントで漏れているところを考えていました。

「障害者」に対する抑圧的なリハビリを経験していた当事者のひとたちが、今回の事件で、自分が体験した虐待から、この事件で、自らの体験がフラッシュバックして、ショックを受けたという話が印象に残ります。マージナルなとされるわたしの立場からは、事件を起こしたひとの優生思想が、自らの中にもあった、そしてそのことを何らかの形でひきずっているところでの、フラッシュバックがあったのですが。そして逆に「精神障害者」へのまたぞろ起きる予防拘禁的な言説が「精神障害者」の立場からの恐れや、批判の言説も出ています。「障害者」当事者の文の方が、「障害者」に関する接点のない非「障害者」のひとには大切な論攷なのですが、「障害者」の立場からはす一つと共鳴して、新しい思いは沸いてきません。ぜひ読んで欲しいとだけ書いておきます。

ひとつひとつコメントしていかなければならないのですが、その他印象に残って、わたしが想起したことだけメモに書き残します。

上野千鶴子さんの「障害と高齢の狭間から」—高齢者が「障害者」の問題を切り捨てようとするということを書きつつ、「高齢者になると少なからず障害者になっていくのだ」というようなことを書いているのですが、わたしはそこを切断しようとする、切断が起きてしまうのは、「ぼっくり死ぬ」という論理なのではないかと思うのです。この社会になぜもこんなに「ぼっくり死にたい」という意識が広がっているのか、実はそのことの中に「障害者」差別があることを押さえ、批判していかななくてはならないと思うのです。

斎藤環さんの「「日本教」的NIMBYSMから遠く離れて」—斎藤さんはブログ 355 できりあげた石原慎太郎さんと対談したひとです。措置入院が、逆に事件の大きな要因になったのではないかと書いていることが印象に残りました。

市野川容孝さんの「反ニーチェ」—最近ニーチェブームが起きているとか、そこで取り上げられているのはニーチェの良い面だけで、実はナチズムと思想的なことに影響を与えた「愛」という概念について批判しています。青い芝の行動綱領の「愛と正義を否定する」ということにつながっているのですが、安倍昭恵さんが沖縄のテントを訪れた後にブログに書いていた「愛と調整」ということばを、わたしがソフトファシズムと批判したことにもつながっています。

大谷いづみさんの「「生きるに値しない生命終結の許容」はどのように語られたか」—優生思想の歴史を書いてくれています。

杉田俊介さんの「優生は誰を殺すのか」—日常的意識の中の優生思想を取りあげていません。

児玉真美さんの「事件が「ついに」起こる前に「すでに」起こっていたこと」—児玉さんは外国での優生思想を取りあげて情報を流してくれているひとです。医療の現場での優生思想的なことを紹介してくれています。

深田耕一郎さんの「介護者は「生気の欠けた瞳」をしているのか」—通常優生思想をもつひとは「障害者」と接触の経験がないところで優生思想にとらわれていくことが多いのですが、今回の事件を起こしたひとは元職員のひと。むしろ施設の中で介護の仕事をする中でもってしまったというところを自立生活運動をする「障害者」の介助をしてきた立場からとらえ返しています。ずっ—と言われてきた、施設の批判の問題です。

岡原正幸さんの「このいま、想像力の圧倒的欠如」—日常的意識の中に孕まれる、そして政策の中で広がる優生思想を問題にしています。まさに「障害の社会モデル」的なとらえ返しです。そのことはわたしの中では、「犯罪の社会モデル」というとらえかたにまで波及していきます。この文を読んでいて「わたしもUである」という思いを抱きました。この文の中では、このような事態の中で、どうしていくのかということの問題にしつつ、ノルウェーの反多文化主義批判の極右テロ事件の後に、首相が「監視や管理の強化を整えるのではなく、「私たちは私たちの価値を放棄したりしない、今回の事件に対する私たちの回答は、さらなる民主主義、さらなる公平性、さらなる人間性だ」と訴えた。」とあります。また、ドイツにはユダヤ人虐殺の記憶を忘れないために、収容所からガス室に送られたであろうひとの名を、そのひとが住んでいた地区の石畳に真鍮板が「つまづきの石」と名付

けられて埋め込まれているという話も書かれています。この事件が既に過去のこととされていこうとすることに抗して、わたしたちも記憶を残して行く必要を思っています。

猪瀬浩平さんの「土地の名は残ったか？」一東大で教員をしている「障害者」が呼びかけて、この事件の被害者への追悼集会が行われたことを、なぜ都心のしかも、「知的重複障害者施設」とは逆の「知の集積」のようなところで開かれたのかということから、この津久井いうところで施設が作られた背景のようなことを、書いています。わたしは母の介護をしながら「ぼっくり死にたい」という母のつぶやきの中に「障害者」を否定する論理、優生思想があることを押さえていましたが、この文を読みながら優生思想というのは、例えば学歴とか能力とかを比べるところから、比べるという行為の中に、優生思想がすでにあるのだという思いも湧いてきます。そういうことはわたしの中にも少なからずあったことで、しかも引きずられている、そういう意味で「わたしもUである」ということばが出てくるのです。反差別ということの突き詰めから、この事件をとらえ返していく必要を感じています。（この文の中には夏目漱石の引用も出ていて、興味深く感じていました。）

初期優生思想を「社会主義者」も担っていたことを押さえざるをえません。そのあたりは労働価値説というマルクス思想の曲解が、「働かざる者食うべからず」という「障害者」差別の論攷につながっていったということをとらえ返し、青い芝の労働崇拜批判とにもリンクしていきます。「反差別原論」を書き始めようと思っています。

映像鑑賞メモ

「障害者」関係の映画3本。「場面緘黙症」の子どもの学校での生活を描いた映画と、「聴覚障害者」関係の映画2本です。

たわしの映像鑑賞メモ 016

・金田敬監督「校庭に東風吹いて」2016

周りで評判になっていたので観に行きました。

小学校を舞台にした映画です。「場面緘黙症」の子どもとシングルマザーで貧困に陥っている家庭の子どもを担任した先生の奮闘を題材にした映画です。原作本があり、教員で「場面緘黙症」の子どもと出会った教員がいて、それを題材にした映画なのです。原作本は読んでいないので、どこまで原作に忠実か分かりません。

はっきり言って分かりませんでした。沢口靖子演じる先生は、教員に成り立ての頃、失敗した経験から、生徒に頑張ろうというのは止めたという先生という設定です。最後にシングルマザーの子どもが転向するときに、担任になった当初に生徒に出した作文の宿題に対する応答の作文を読み上げるのですが、「どういうクラスであって欲しいか、どういう先生になって欲しいか」というテーマの宿題です。そこで、「普通に」ということばを使います。ところが、この先生は頑張りすぎて倒れた先生なのです。おまけに、「場面緘黙症」の子どもの母親も、先生に「普通に接して欲しい」というのですが、この母親も頑張る母親

なのです。そしてその母親が頑張ることを子どもに強要するから、ますます子どもが辛くなる、閉じこもるという設定なのです。

わたしは「吃音」という「言語障害者」と規定されてきた「障害者」です。

その立場からすると、言葉が出ない、出にくい子どもと接するときはどうして欲しいかの思いがあります。先生がシングルマザーの家族の子どもが差別されていきなりなぐりかかったことに、言葉の大切さを言い、「ちゃんと言葉で伝えなさい」というシーンがあるのですが、それを「場面緘黙症」の学校では言葉の出ない子ども前と言うのは、その子どもにとって抑圧以外のなにものでもない、わたしは思うのです。母親に「お母さんが変わらねば」と迫るといった場面も出てくるのですが、このあたりは、わたしは「吃音児」や「自閉症児」の親の責任論の話にも通じる話で、親あたりからも批判が出ることではないかと思うのです（確かに親の対応で変わることもあるのですが、「親の責任」の問題ではないのです）。

さて、教員に成り立ての頃、失敗した経験から、生徒に頑張ろうというのは止めたというのに、自分が頑張る熱血教員は結局、子ども達にそれが伝わっていきます。子どもに対する思いを持ちつつ、もっと淡々と接していくことが必要なのではと思うのですが、どうなのでしょう？

色んな試行錯誤の中で、どう接していくのかという議論があるはずですが、この映画には、専門性（これは実は曲者です。ほんとの専門家は当事者ですが）が必要なところでは、監修のようなことが入るのですが、それもパンフには出てきません。

この映画では、熱血先生の思いがうまく回って、たまたまうまくいくのですが、うまく行かなかつたら、却って閉じこもるようになる場合もあるのではと思います。

わたしは中学の時、わたしの「吃音」を気にかけて担任の教員が、「民間の移動矯正所」を探してきて、わたしに夏休みに通うように勧めてくれたのですが、わたしにとっては、それを境に「どもってはいけない」という意識が強まり、「吃音の高度化」をもたらしたという経験があります。尤も、わたしはそこから「障害の否定性」の否定というところに進んでいったので、それもまたひとつの「体験」として語れるのですが。

周りの人たちはこの映画に感激したという話が多かったのですが、わたしはむしろ違和が残る映画でした。そもそも障害の医学モデルではない、実際にどういう当事者にどうして欲しかったかということを含めて、学的な押さえが必要になってくるのですが、そのあたりの、差別というところからとらえ返した、障害のとらえ方が必要になってくると思うのですが、このあたりはそもそも整理されていず、結局教員が熱意で乗り切ろうとするので、抑圧的になっていくことも出てきます。

たわしの映像鑑賞メモ 017

・今村彩子監督「Start Line」2016

これも他者から聞いて観に行った映画です。

監督の今村さん自身が「聴覚障害者」で、お母さんを亡くしたショックの中で、そこから立ち直る意味も込めて、「コミュニケーション」をテーマに、沖縄から北海道北端の宗谷岬まで自転車縦断旅行を撮影も担当する、自転車ショップの店員で手話も少しできる伴走

者とツーリングするという話です。

今村さんはお母さんの熱心な指導で、口話もかなりでき（声はわたしはほぼ聞き取れます）、筆談もできる、でも聴者とコミュニケーションを積極的にとれないというところを、なんとかしようと、そこで自己変革というところの意味も込めてこの自転車横断旅行を企画し、それをドキュメンタリー映画にしようとしているのです。もともと何本かの作品を残してきた監督なのです。

で、最初にルールを4点確認して始まるのです。それは、パンクなどの修理は自分でやる、伴走者は通訳のようなことはしない、迷ったりしてもその場で指摘はしない、もうひとつが思い出させません。コミュニケーションがテーマですから、自分で積極的に話しかけてコミュニケーションをとっていく、というようなことだったと思います。で、叱られてばかりの旅行なのです。「叱られた回数500回以上、褒められたのは2回」とパンフに書いています。そうとう気まずい関係になりつつも、伴走者との関係を修復しつつ、300人以上のひとと出会い旅行していきます。特にオーストラリア人で日本縦断自転車旅行をしている「聴覚障害者」との出会いが印象的です。最後は大勢のひととコミュニケーションをとるのが苦手な監督が、ツーリング者が大勢とまっているところで交流をして旅行を終えるのですが、「まだスタートラインがおぼろげに見えたところだ」というところで作品が終わっています。繰り返し繰り返し、落ち込みつつ、それなりの達成感のようなこともあり、たぶんほとんどの聴者がみるとそれなりにそこに共感する「すてきな」作品となっています。

さて、叱られる内容ですが、監督は自動車の運転免許をもっているのですが、ツーリングのルールや自転車走行のルールさえ、自転車をこぐのに一生懸命になるなり、疲れたりして忘れてしまうのです。信号無視もしたりして、伴走者がそういうときはすぐ止めて「ルールを守らないと、どっちかが死ぬ」と強く叱るのです。もうひとつ、路肩でパンクをなおしているところを、「わたしはどうせ役に立たない」からと、見過ごして行ってしまうところで、叱るシーンもあります。これはツーリストのルールのようなことで、「伴走しているわたしは直せるし、何か道具を貸せることもある」と伴走者がえらく叱るシーンもあります。このあたりは、伴走者が付いた意味ということも含めて、ルールを教えるということで、当然のことなのですが。

さて、コミュニケーションに関しても、伴走者はなぜ「積極的に自分でコミュニケーションをとらないのか」と叱るシーンも出てきます。ツーリングの目的からすると、そうなるのですが、そもそも、伴走者自身も飲み屋で、監督をさておいて、出会ったひとと話したりして、監督から反撃されるシーンがあります。この監督は、結構意地っ張りなひとで、叱られたとき、なんやかんや言い訳をして、「ごめんなさい」と言わないのです。そこで、「なぜ「ごめんなさい」といわないのか」とか、「ごめんなさい」と言っても反省していない」とか叱るのです。一度、「なぜ、言わないのか」と言われて、「言わない、手話する」とか言って、思わず笑ってしまうシーンもあります。

このあたり、わたしはもうひとつルールを作っておくことではなかったかと思うのです。それは伴走者はしゃべらない（声を出さない）というルールです。

この映画は、実は監督自身はテーマにしていらないのですが、もうひとつのテーマが隠されています。それは「そもそもコミュニケーション障害とは何か」ということです。

伴走者が「口話が読み取れないときでも、筆談をしてというと、ほとんどのひとがやってくれる、なぜ筆談で積極的にコミュニケーションをとらないのか」と言ったりしています。ですが、この映画に出てくるシーンでも、筆談を頼んでも「俺は書かない」と言うひともありますし、口話で読み取れるときもあると、「読み取れるときもあるし、読み取れないときもある」ということが分からないで、書いてといっても、一回書いてもすぐ忘れてたり、筆談が継続していかないシーンがあります。また、伴走者が監督が訊かないで、自分で判断して動いて道を間違えたりすると、「時間を浪費した」とか叱るシーンも出てきます。実は、こういう「時間の無駄」とか「効率性」みたいな論理自体が、「筆談が面倒」という聴者側の意識を形成している、そこにつながっていることが今ひとつつかめていないような気がします。伴走者は監督を「雑」ということで批判もしているのですが、このあたりはろう文化や「障害者文化」のようなことで文化の違いのようなこととして健全者文化批判として展開してきたことです。

「障害者」はそのようなことを日々体験しつつ、非「障害者」とコミュニケーションをとるのがおっくうになります。また、伴走者が叱っているときに、目をそらしていると怒っているシーンがあるのですが、コミュニケーションの問題で怒っているときに、そこにコミュニケーション障害を受けてきた立場から、目を合わせているなんてないのではないかと思います。ちなみにねこの伴走者もコミュニケーション障害を「聴覚障害者」の立場からもう一度とらえ返すということができていないのですが、坊主頭で僧的な哲学をもっていそうな雰囲気のあるおもしろそうなひとです。このツーリングで12キロも痩せたというくらいに、監督のサポートをした熱意あるところで叱り続けた熱意あるひとなのです。その熱意が少し抑圧的になっている感もあるのですが。

監督もろう者と会って手話で話しているときは生き生きして、まだ手話初心者の伴走者が逆に疎外感を味わっている場面も出てきます。

そもそもこの映画は、「聴覚障害者」が非「障害者」の中でどう生きていくのかというところで、「聴覚障害者」がコミュニケーション障害をどう克服していくのか、というテーマなので、こういうほぼ一方的に叱られるというようなことになっていくのですが。むしろ、聴者側がもっている「聴覚障害者」に対する勘違いのようなことを、監督が意図したことではないにせよ、描いている映画でもあります。オーストラリア人の「聴障者」は「中途失聴者」で補聴器でかなり聞こえるようで、日本人聴者と日本語をまじえて話しているので、なぜ、自分が積極的に話せないのかと監督自身落ち込むのですが、それは聴者が外人に合わせようとするからで、「聴障者」には自分たちに合わせることを要求する、非対称性があるからです。昔、ある大学で「聴障者」の生徒に指導教官が、「もっと口話を身に付けてコミュニケーションがとれるようにしなさい」と指導したという話があります。口話には限界があります。なぜ、指導するに当たって、自分が手話を学ぼうとしないのか、そこにコミュニケーション障害の問題の非対称性があるのです。

わたしは「吃音」と規定される「言語障害者」です。「吃音者」には現地語が話せなくても、言葉が通じない外国人として対応してくれるからと、英語がすこしできるくらいで外国にいけば楽になれると旅行するひともあります。そんなことをオーストラリア人の旅行者にもみてとれます。聴者に合わせることを強要され、しかも口話ができても手話だけで生活

するのではない、マージナルな「障害者」の立場でのコミュニケーション障害の問題としてわたしはこの映画を自分の立場性から観ていました。そういう意味で、興味深い映画です。

たわしの映像鑑賞メモ 018

・山田尚子監督「聾（こえ）の形」2016

これも他者から聞いて観に行った映画です。

これはマンガで連載されていたのを以前見ました。それをアニメ化した映画です。マンガはブログ 226 大今良時「聾の形」(『週刊少年マガジン 2013 年 3/6 号』講談社) でとりあげました。実は、連載一回目を読んだだけで、それが連載されていくというのを失念していました。後で「講談社コミック」として単行本になっていたようです。それを映画化しています。ちょっとコミックと最後の処変わっていた、という紹介してくれたひとの話です。

ブログ 226 で書いたときと、随分印象が変わりました。いじめは、受ける側は勿論、いじめた側も傷ついているというような描き方になっています。更に、いじめする側の自己合理化の心理的事も描いています。「障害者」を描くと差別の問題を抜きにしたきれいな映画になってしまうのですが、あえていじめを真っ正面からとりあげた映画になっています。ただ、いじめで互いに傷ついたことの関係の修復というテーマなのですが、そのまま傷ついたら終わってしまったらどうなるのか、という意味ではきれいな事になってしまいます—そういう意味ではどうとらえたらいいのか難しいのですが—きちんととらえ返していくきっかけにもなるような映画であるとは言い得ます。

わたしにとっていじめ問題は自らのいろんな経験でも大きなテーマです。一度ちゃんと書こうと改めて思っています。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 61 号」アップ(16/11/18)

◆前号 60 号の巻頭言の文「障害の医学モデルと「社会モデル」の統合という錯誤」を、イラストを差し替え、文を書き足しました。それを HP の「研究会の文書一覧」にアップしました。

◆ホームページのプロバイダーがサービスを停止すると予告してきています。この際思い切って大幅に改め、読書メモを参考文献として整理していく作業などをしていき、少しずつ新しいホームページに移行する準備をします。

追悼

あるろう者の死

わたしが手話を地域の手話通訳者養成の講習会で学び始めたときに会ったろう者がいました。

わたしはそもそも、「言語障害者」の立場でコミュニケーション障害の共通性というところで、「聴覚障害者」と一緒に運動していくために手話を学び始めました。で、手話通訳者になる気持ちはなく、それなりに手話を身につけたら、自分の立場での運動に戻るつもりでした。ですが、美しい日本手話のろう者のすてきな話とかその人格に惹かれて、手話自体の魅力にもとらわれ、地域の手話サークルの基礎作りにのめり込みました。

そういう中での冒頭の彼との出会いです。手話講習会の終わる時間に、駅の改札口のところで待っていて毎週かならず一緒に飲みに行きました。それは手話サークルの後の飲み会にも続きました。手話サークルの先輩の、「手話は酒話」、お酒を飲みながら交流し手話を学んでいくという教えもありました。日本手話の美しいろう者とともに、わたしの手話の原点だったのです。

かれは学校に通った経験がなく、20歳のころ上京し、当時新宿区の戸山にあった聴覚言語センターで手話とともにいろいろ学び、社会生活のスタートを切ったのです。そこでの彼の思い出があり、ともだちもいたようなのですが、地域のろう者の仲間の中にはなかなか入れなかったのです。かれは東京都の手話講習会や地域の手話講習会に現れ、いろんな話をしてくるのです。かれは、自分の世界にみんなをひきづりこんでいくのです。クイズのような話、自分の心の動くままに話が次々に移っていくのです。

わたしにとって、そしておそらく東京都の手話通訳者にとって、かれはろう運動の原点のようなひとでした。

地域の手話サークルの会長から、「かれが住んでいる近隣との軋轢が生じているので、一緒に生活しないか」と言われたことがあります。わたしは何回か共同生活をした経験があり、男同士の共同生活の息苦しさを経験し、そして地域を離れて自分の活動をしていく予定があり、「とても他者の生活は抱え込めない」と断りました。それから、わたしは地域を出たり入ったりしていたのですが、彼との2人きり、そしてもうひとりのひとを入れて、そしてお誕生日のお祝いの会などかれとのつきあいは続きました。ずーっと彼の言われるままにつきあってきたところから、ときおりけんかもできる関係になっていきました。

晩年彼は、入退院を繰り返していました。彼には孤高のひとというイメージがあったのですが、地域の手話通訳者や東京都の手話通訳者に支えられて生活していました。彼が入院していたときにも、何人ものひとが見舞っていたようです。わたしも少しだけそのサポートの輪に入り、看護師さんに無理を言って、最後の夜に付き添い、看取ることができました。かれはわたしの手話のそしてろう運動のみならず、「障害者運動」の原点であり続けます。彼を送って心の中のすきまがまだ埋められないのですが、これからも、彼への思いで、他のろう者やろう運動に関わり続けようと思っています。

彼はわたしの中で生き続けます。

合掌

『反障害原論』への補説的断章 (25)

<障害>の手話による障害の医学モデルと「社会モデル」、関係モデルの論考

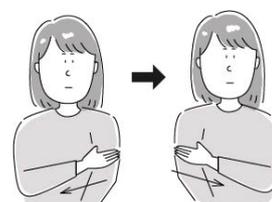
前号巻頭言の「(2) 手話の<障害者>の表現からのとらえ返し」で、イラストを本からとっていたのを、著作権ということを考え、縁あって知り合った柳澤美樹さんに頼んで描いて貰い差し替えました。また説明のために手話を造語して、イラストを描いて貰い、追加論攷しました。

元原稿を書き換え・加えた全体は HP に掲載していますので、そちらを見て下さい。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/dis-chang.pdf>

手話で<障害者>ということばをとらえ返すと、障害のモデルの転換が鮮明になっていきます。手話で表すことによって、難しい議論を整理できるのではないかと、わたしは『反障害原論』の分かりやすい版を手話ビデオで作り、それを書記日本語に翻訳しようかという作業に入っています。その一端の論攷です。

さて、話に入ります。<障害者>の日本での手話は二通りあります。ひとつは、日本手話的な表現として、直訳として「手がない—落ちている」とも訳せるような表現です。これを<障害①>と表します。この<障害①>に<人々>をつけて<障害者①>となります。勿論、「障



<障害①>

害者」にもいろんな「障害者」がいて、「障害者」の一部にしかこれは当てはまりませんが、これは手話独特の代表表現とも言い得ることで、この表現は、運動をしている「聴障者」や通訳者の間では使われません。差別的になるという含意です。それは非「障害者」が「障害者」の「障害」をまねることで差別してきた歴史からきていることとしてわたしは押さえています。しかし、そもそも手話にはその状態をまねることによって手話の単語を作ってきた歴史があるわけで、このろう者の手話自体が差別的というわけではないと思います。もちろん、ろう者の中にも、この差別的社会の差別観を取り入れているひともいるわけで、必ずしも差別的ではないとまでは言い得ないとは思いますが、とりあえず、一般に差別的とは言えるわけではないといういい方になります。このように他の「障害者」と一緒に動く中で、また通訳者が介在する中で、他の「障害者」が違和を感じる（感じるだろうと思われる）語が使われなくなったりしました。これは障害問題だけでなく、他の差別の問題でも、「差別的なこととして」使われなくなっている手話の単語がいくつかあります。



<者(人々)>



<障害②>

ところで、もうひとつの<障害②>は、「壊れている」という表現です。これも、<人々>をつけて<障害者②>とします。<障害者②>の表現は直訳すると「壊れているひとびと」という表現です。わたしはこれは明らかに差別的表現だと思っていて、「この手話なんとかしようよ」とろう者に提起していました。そこで、言われていたのは、「そもそも聴者、非「障害者」が、「障害」を欠損として「障害」としてとらえてきているから、ろう者もそういう表現しているだけだ」ということです。

さて、ろう者—日本手話話者から、今出てきている提起があります。

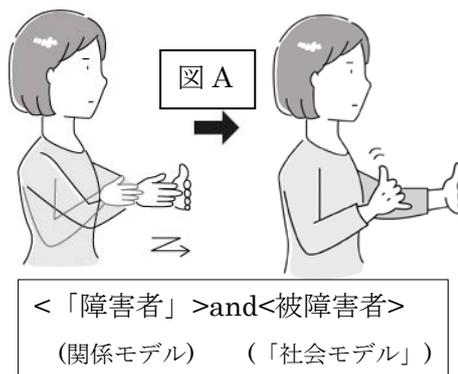
講演会で、あるろう者が、従来使われている<障害者②>の表現はおかしいと指摘し、<

障害者③>の表現をした方がいいのではと提起していました。

<障害者③>は、右図<障害③>に<ひとびと>という表現をしている造語で、<壁—バリア>に<突き当たり—はねのけられる><ひとびと>と分解できます。意味的には「バリアによって妨げられているひとびと」という意味になります。ここで、押さえておくことは、<バリア>の手前(自分の体に近い)側に<ひとびと>という手話を表すということです(手話通訳者から、この<障害者③>は、参加を拒まれているという意味でかなり広く使われているという話も聞きました)。



これは「社会モデル」的な意味で‘被障害者’という含意になります。(これはわたしの関係モデル的表現では、‘障害者’という表記になります。図 A です)



<バリア>を作ったのは、<バリア>のあちら側(バリアからからだに遠い側)にいるひとで、まさにそちら側が、本来の障害の使い方(「障害物競走」などと使われる)からする‘障害者’なのだと言えます。そちら側を‘社会’とした時に、それがまさに「障害の社会モデル」ということになります。この場合の‘障害者’の<ひとびと>は<バリア>として残した左手のあちら側(体から遠い側)で表現することになります。これも右図(図 B)で表しています。



さてもう一点書き置くことがあります。それはイギリス発の「社会モデル」の、不備につながることです。それは「社会モデル」は排除型の差別を押さえているけれど、同化などの抑圧型の差別を押さえていないという問題です。ですから、手話の問題で

言えば、「社会モデル」の補完形として、<障害③>という表現の後に<抑圧>の表現をし、その後<ひとびと>の手話をつけることになります。ただ、前述した「手話の代表表現」でやっているとして、省くことは可能だとも言えます。

手話の造語的なところのイラストを使って説明をしましたが、手話の造語を聴者がすると批判されます。ですが、そもそも「社会モデル」自体が過渡的な理論です。図 A、図 B の説明で、「<バリア>として残した左手のこちら側」—「あちら側」という書き方をしていますが、<被障害者>と言っても、自らも差別的な意識から完全に自由になっているとは言えません。そういう意味でも「社会モデル」は過渡的な提起であり、図 A、図 B のイラスト自体も説明のための過渡的なことで、残す手話ではありません。

(編集後記)

◆巻頭言の文、安倍政治の攻勢が続き負け続ける中で、批判がいろんな方向に向かっています。シールズのことをどうとらえるかということもわたしも書いていますが、そもそも自分たちの運動の崩壊的情况下でこのような事態に陥っていることをはっきり押さ

え、これまでの運動の総括のようなことをしっかりしていかななくてはと思っています。

◆「読書メモ」は、原発―原爆関係が一段落して、運動関係の疲れる本をざっと読んでいました。やっと障害学関係の本に戻ります。そこから、反差別論関係に踏み行っていきます。運動の総括的なことも含んで、マルクス派の思想の流れを押さえていくことにもなっています。

◆今回の映画はいずれも、すんなり観れませんでした。いろいろ考えさせられる映画でした。

◆ろう者の友人が亡くなりました。元地域のひとで、元地域のひとに会ったり、連絡が来たりすると、彼のことを思い出します。父も母も看取ったのですが、何か今回の方が思いを引きずりそうです。

◆前号の巻頭言の手話での障害概念の説明、手話の辞書からイラストを借用していましたが、縁があってイラストを専門学校の学生さんに頼みました。造語的なことをしたので、説明して描いてもらいました。本文にも書きましたが、説明のための造語で、残すことはないので、許してもらえと思っています。

◆次回も、隔月で出す予定です。「反差別原論」の断章を本格化します。

反障害―反差別研究会

■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと思っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

ホームページトップ

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/httpwww.k3.dion.ne.jp~adsnews.html.html>